

チェコ語のはなし¹

まえがき

こんど日本チェコスロバキア友好協会の関西支部の御好意で、チェコ語のはなしを書かせていただくことになりました。

おしまいまでちゃんと書き通せるかどうかとても心配ですが、あまり心配ばかりしていてもしかたがないので、思いきって書きはじめてみることにしました。

チェコ語は昔から数多くのチェコの人々が自分たちのかけがえのない宝として、だいじにまもり、育ててきたことばです。わたしたちが話している日本語もそうですが、ことばというものは、ほっておいてひとりではできあがってくるものではありません。そのことばを話す人々の、長い、たえまない努力によって育てられ、人に自分の考えを知らせるための道具というだけでなく、文化のにない手となり、やがてこのことばを話す人々の魂の一部とさえ、感じられるようになるものなのです。

チェコ語のはなしを通じてチェコの人々がどういうように自分たちのことばをまもり、そだててきたかを知り、そのことによって、このはなしがわたしたちが何気なく使っている日本語についても、みんなで考えるきっかけになれば、とてもうれしいことだと思います。

自分たちのことばに誇りをもつことができなければ、よその国のことばについて、そしてまたそのことばをまもり育ててきた人々について、尊敬の気持をもつことはできないでしょう。わたしたちは自分達のことばを大切にしながら、チェコのことばと文化について少しでも深く知り、おたがいに尊敬し合うことが必要だと思います。そうすることによってはじめて、わたしたちはチェコの人々と本当に仲よくすることができると思うからです。

¹本稿は VLTAVA「ブルタバ」No. 9～No. 25、No. 34～No. 35 (日本チェコスロバキア協会関西支部・機関紙、No. 34、No. 35の発行は関西チェコスロバキア協会による)にわたって連載されたものである。連載19回。ブルタバに掲載したときの体裁は縦書きであったので、数字は漢数字を用いたが、この度は横書きなので、西暦年はアラビア数字、一世、二世などはローマ数字とした。

わたくしはこのはなしを、できるだけやさしいことばで書くことにしました。それは、わたくしがやさしいことばで書くことが大の苦手なので、これをかくことによって自分の勉強に役立てたいという気持ちもあります。けれども一番大きな理由は、このはなしを小学生や中学生の人たちにもよんでもらいたい、と思っているからなのです。なれないことばで書くのですから、いろいろことばづかいなどで、変なところがあると思います。そういうときは、ご面倒でもどしどしおしらせ下さい。どうかよろしくおねがいたします。

I. はじめに

§1 チェコ語を勉強していると、「チェコ語ってどういうことばですか」とよく質問されます。

このような質問には、大まかにいって二つの答え方があると思います。このことばがどんな文法や単語をもっているかとか、どんな「変った」音をもっているかというような答えと、チェコ語がほかのことばと、どういう関係をもっていたか、どういう人々が使い、どういう文化を育てるための道具として役立ってきたか、という説明です。

はじめの方の説明を仮にことばの「構造」の説明、あとの方の説明を「言語文化史」の説明、とでもよんでおくことにしましょう。

あることばが、「どんなことばであるか」という質問に答えるためには、実はこのような二つの面からの説明が必要なのです。

しかし、「構造」の方は、実際にチェコ語の勉強をした上でなければ、わかりません。そこでここでは特にあとの方つまり「言語文化史」の説明に重点をおいて、考えてみることにしたいと思います。

§2 そこでまずこの立場から、チェコ語の戸籍調べをしてみようと思います。話がちょっとむづかしくなるかも知れませんが、チェコ語はスロヴァキア語やポーランド語などと一緒にあって、「西スラヴ諸語」という仲間を作っています。それでは「西スラヴ諸語」というのは何ですか、という質問をしたとしますと、これ

は「スラヴ語派」という仲間の一部です、という答えが返ってきます。では「スラヴ語派」って何ですか、とたずねますと、きっとこれは「インド・ヨーロッパ語族」の一部です。という答えが返ってくるに違いありません。

こういうわけなので、説明を簡単にするために、いまいった順序を逆にして、祖先の方から順番に、大まかな説明をしてみたいと思います。

しかしそのまえに、ことばというものがどういう風にして生れるものかを、説明しておかなくてはなりません。ことばも人間と同じように生れ、子孫を残して死ぬか、または子孫を残さないで死んでゆくものなのです。

§3 いまここに同じことばを話す人々の集団が広い地域に広がっていて、おたがいにいつも話し合うことがあまりないと、時がたつにつれてことばが少しずつ違ってきます。これを「方言」といいます。もっと時間がたつと、この方言のあいだの違いはどんどん大きくなり、やがておたがいに話しが通じなくなります。新しいことば — 言語 — が生れたのです。このようなことが、人間のながい歴史の中で、たえずくり返されてきました。そのばあい、あとで分れた言語ほど、たがいによく似通っているのは、当然のことです。ですから方言と言語のあいだには、はっきりした区別はありません。たとえばポーランド人とチェコ人は、それぞれ自分のことばで話しをしても、相手のいうことが何とかわかるそうです。このばあいには、二つのことばは、言語といっても、まだ方言にとっても近い関係にあるということができましょう²。

II. チェコ語の祖先

§4 さて大昔、一つのことばを話す人々がいました。このことばを話す人々は、はじめヨーロッパのどこかアジアに近いところに住んでいたと考えられています。これらの人々はやがていろいろな理由でだんだん広い地域にすむようになり、それにつれて話すことばも地方によって少しずつ違ってきました。このことばを私たちは「インド・ヨーロッパ祖語」とか、簡単に「印欧祖語」というように、よん

²以上 No. 9 (1979年7月7日)、4-5頁に掲載。

でいます。学者によって多少の違いはありますが、このことばは少くとも紀元前二千年よりまえの時代に、話されていたと考えられています。もちろんこんな古い時代ですから、文字はなかったと考えられています。またもしあったとしても現在まで伝わってはいません。けれども「比較言語学」という学問の発達によって、このことばについては、いろいろなことがわかっていきます。

§5 この印欧祖語は、前の節でもいいましたように、方言に分れていたと思われますが、これらの方言も、時がたつにつれてだんだん違いが大きくなり、やがてそれぞれ異ったことばになっていきました。そしてこのことばを話す人々が住んでいる地方も大きくひろがって、東はインドから、西はバルト海の沿岸や、いまのイギリスの地方にまで及ぶようになっていきます。インド・イラン、イタロ・ケルト、ゲルマン、アルバニアなどよばれる「言語」がこれです。その中にいまのチェコ語の祖先にあたる「バルト・スラヴ」という「言語」もありました。

もちろんこれらの「言語」は、そのままいまままで生きのびているわけではありません。また枝分かれしてそれぞれ新しいことばになっていくわけですから「子孫」のことばからみれば、これらの「言語」もまた「御先祖様」だということになります。そこで学者はこのことばを「バルト・スラヴ祖語」とか「バルト・スラヴ共通語」というようによんでいます。このバルト・スラヴ祖語は、また分れて「バルト祖語」と「スラヴ祖語」とになりました。こういうわけで私たちはやっとチェコ語の直系の「御先祖様」のところまでたどりついたわけですが、この「スラヴ祖語」から分れてできた子孫のことばの全体を、私たちは「スラヴ語派」といっているのです。

私たちが身近に知っている英語は、ドイツ語と同じようにゲルマン語派に属することばですし、フランス語やイタリア語などは、スペイン語と一緒に、イタロ・ケルト祖語から分れた、イタリア語派に入っています。

みなさんはお墓にあって細長い木でできた「そとば」をみたことがあると思います。そしてその上に書かれている一風かわっていて、とてもありがたそうな文字に気付いた方もきっとあると思います。この文字であらわされるインドの梵語

もインド・イラン語派のことばで、チェコ語やロシア語の遠い親類にあたるものなのです³。

III. チェコ語の近い親類たち

§6 さてチェコ語の祖先のスラヴ祖語は、印欧祖語と同じように文字によって伝えられてはいませんが、これはやがて東、南、西の三つのグループに分れました。このときまず西のグループの祖先がわかれ、しばらくして東のグループの祖先と南のグループの祖先とが分れたと考えられています。わたしたちが今知っていることばは、それぞれこの三つの祖先から分れてできたものです。こういうわけでスラヴ語派の言語は、更に「東スラヴ諸語」、「南スラヴ諸語」、「西スラヴ諸語」の三つに大きくわけることができます。

チェコ語は一番近い関係にあるスロヴァキア語、ポーランド語、ソルビア語などと一緒に、西スラヴ諸語を作っています。またロシア語はウクライナ語、白ロシア語と一緒にあって東スラヴ諸語を作り、ブルガリア語、セルボ・クロアチア語、スロヴェニア語などは、南スラヴ諸語を形づくっています。

チェコ語がポーランド語などとよく似ているのに、ロシア語とは少しちがうという感じがするのは、チェコ語とポーランド語が「兄弟」なのに、チェコ語とロシア語とは「いとこ」の関係にあるためなのです。

まえにことばが死にたえてしまうこともあるといいましたが、チェコ語の兄弟にも、そのようなことばがあります。いまの東ドイツにあるダンネンベルクのあたりに住んでいる人々が使っていたボラブ語がそのことばです。これは十八世紀のはじめには、子孫をのこさないで死にたえてしまっていました。ほんとうにざんねんなことです。

§7 これでチェコ語の戸籍調べは一応終ったわけです。けれどもここにもう一つ、どうしてもお話ししておかなければならないことばがあります。それは「古教会スラヴ語」とか「古代スラヴ語」とか「古代ブルガリア語」というように、

³以上 No. 10 (1979年10月7日)、5頁に掲載。

いろいろな名前ではばれていることばです。このことばが、スラヴの人々の文化にとってとても大切な役割りを果たしたからです。

戸籍のうえでは、このことばは、いまのブルガリアにあるテッサロニカというところで九世紀頃にはなされていたことばをもとにして作られたものです。ですからこのことばは、もともと南スラヴ諸語の祖先にあたることばといえます。「古代ブルガリア語」というのは、このような理由でつけられた名前なのです。

ところでこのことばは、紀元九世紀からキリスト教の聖書や、キリスト教に関する書物を訳すのに用いられ、書かれたものとして残っている最初のことばなのです。「古教会スラヴ語」という名は、このことを考えてつけられたものです。

このことばは、いまもいいましたように、南スラヴ諸語の祖先にあたるものではありましたが、そのころはまだスラヴ祖語の中の分れかたが、あまり大きくはありませんでした。ですからこのことばを文字であらわした「古教会スラヴ語」も、文字にのこされていないスラヴ祖語とは、そんなに違ったことばではなかったと、考えられています。このためスラヴ祖語がどのようなことばだったのかを知るための、いろいろな手がかりをつかむためには、このことばを研究することが、とても大切なことになります。

そればかりでなく、このことばがとりわけ大切なのは、このことばがスラヴの人々の文化を発展させるうえで、かなめの役割りを果たしていたところにあります。まえにもいいましたように、このころは未だ方言の違いがさほどめだったものではありませんでしたから、このことばで訳されたキリスト教の教えや聖書は、スラヴ世界のすべての人々がよく理解できるものでした。このためこのことばは、スラヴ世界全体に共通のことばとして、文化を作りだし、発展させるための大切な手段となることができたのです。

「古代スラヴ語」というのは、このような役割りを考えてつけられた名前でした。このことばは、実はチェコの人々にとっても、とりわけ縁の深いことばだったのです⁴。

⁴以上 No. 11 (1980年2月17日)、5頁に掲載。

IV. 古代スラヴ語の成立ち、大モラヴィア帝国

§8 九世紀よりまえには、ギリシアの歴史家の書いたものや、アラブ人の旅行記などからわずかに様子を知ることができただけだった、文字をもたない野蛮人のスラヴ民族は、この古代スラヴ語が文字によってしるされるようになってから、歴史の光の中にその姿をあらわしてくるようになります。

この古代スラヴ語によって書かれた、いろいろな文献やその他の資料から、逆にこのことばの成立ちのいきさつについて、私たちはいろいろなことを知ることができます。

そこでここでは、このことばのなりたちについて、考えてみたいと思います。

大昔からヨーロッパには、二つの大きな道があったと考えられています。その一つはフランクの国から東へ、アルプスに通じる道でした。もう一つの道は、バルト海の岸边から南の方に下ってローマにまでつづいているもので、コハクの道とよばれていました。大昔ここを通して北の海の沿岸地方でとれるコハクがはこばれていたからです。

この二つの道はいまのチェコスロバキアの中央にあるモラヴィアのあたりで交わっていました。このためこの地方にはいろいろな地方のめずらしい品物が集まり、交換されてまた各地に散らばっていきました。ですからこの地方は交易の場所としてさかえ、富がたくわえられるようになりました。いいつたえによればフランク族の出身でサモという名の商人が、この地方にやって来ましたが、そのうちに力をもつようになって、この地方に住むスラヴの氏族たちのあつまりの長になったといわれています。これは氏族のより集まりでしたので、サモが死んだあと滅びてしまいましたが、やがてこの地方に、スラヴ族の建てた大きな国があらわれました。大モラヴィア帝国といわれているものです。

§9 この国の王になったラスチスラフは、861年にローマの教皇だったニコラスI世に使いをだして、キリスト教を教えるために宣教師を送ってほしいとたのみましたが、教皇に断わられてしまいました。

そこでラスチスラフはその時のビザンチン皇帝だったミカエロスに使いを送っ

て、同じことをたのみました。みなさんもよく知っておられるように、キリスト教の教会は、東のギリシア正教と西のローマ正教とに分裂するのですが、この頃にはまだはっきりと分裂してしまっただけは、ありませんでした。そこでビザンチンの皇帝は、このたのみをききいれれば、ギリシア正教の力が強まるだろうと考えてこのたのみを承知しました。皇帝は早速今のブルガリアにあるサロニカ(テッサロニカ)に住んでいた哲学者のコンスタンチノスと、その兄で司祭であったメトディオスという二人の兄弟を選んで、モラヴィアへつかわすことにしました。そのわけは、この地方はギリシアの植民地だったので、ギリシア語が話されていたが、一方もともとスラヴの人々の住んでいる所だったので、スラヴのことばも話されていたからです。そしてもちろん二人の兄弟は、両方のことばをよく話すことができました⁵。

V. 古代スラヴ語の成立 — スラヴの使徒

§10 コンスタンチノスとメトディオスの二人の兄弟は、さっそうと出発の準備をはじめました。キリスト教の教えを伝え、広めるためには、なによりもまず、スラヴの人々に分ってもらえるように、聖書の教えを訳さなければなりません。しかしその頃、スラヴの人々の使っていることばを書きあらわす文字はまだありませんでした。そこで二人の兄弟はまずスラヴの人々のことばをうまく書きあらわせるような文字を工夫することから、はじめなくてはなりません。

やがて二人は文字を作り、その文字をつかって聖書の一部を訳してから、はるばるモラヴィアへの旅に出発したと考えられています。

ところで、古代スラヴ語で書かれた古い文書には、二つの違った系統の文字で書かれたものがあります。一つはキリル文字といわれているもので、いまのロシア語やブルガリア語を書きあらわすのにつかわれている文字の祖先にあたります。これはギリシア文字を手本にして作られています。もう一つの文字は、グラゴル文字といわれるもので、キリル文字とは全くちがっています。そのうえこの文字を手本にして作られたものなのか、よくわかってはいません。

⁵以上 No. 12 (1980年7月20日)、5頁に掲載。

また二人の兄弟が作りだしたのが、キリル文字なのか、グラゴール文字なのかについても、はっきりしたことはわかっていません。十世紀ごろにブルガリアに住んでいたと思われるフラブルという名の僧が書きのこした「文字について」という、スラヴの文字について書いた一番古い文献にも、二人の兄弟が文字を作ったことは書いてあっても、それがどちらの文字だったのかについては、何も書かれていません。

このもんだいについては、学者のあいだにもいろいろな意見がありますが、それぞれの文字によって書かれたもののことばの特徴やその他のいろいろなことから、グラゴール文字の方が古く、おそらく二人の兄弟が作ったのは、このグラゴール文字だろうという意見をもっている学者の方が多いように思われます。わたくしもそう考えている一人です。

§11 ところで大モラヴィア帝国の王様がキリスト教の教えを広めようと考えようになったのには、それなりのわけがありました。一つにはキリスト教を信じる人々と交わることによって、自分もキリスト教の教えを信じるようになったスラヴの人々の数が、だんだん多くなってきたこともあります。けれどもこれにはそれよりももっと深いわけがありました。それまで多くの酋長が、それぞれ自分の種族を治めていた時代がすぎ、封建制の社会が作られるようになって、大きな国家を治めなければならないようになったとき、たくさんの神様がいるようなそれまでの自然宗教よりも、一つの神を信じるキリスト教をとり入れた方がよかったからです。どうしてかといえば、封建制の国家というのは、大ていのばあい一人の王様がいて、国中を治める形をとっており、たくさんの酋長がそれぞれの種族を治め、あつまってゆるやかな連合体を作っているという形とは、まったく違っていたからです。

§12 しかしキリスト教をとり入れるということそのものよりも、スラヴの人々にとってはかり知れないほど大きな意味をもっていたのは、スラヴの文字が作られ、しかもその文字によってキリスト教の教えが、スラヴの人々にわかることば

で伝えられるようになった、ということでした。

というのはこのことによってスラヴ世界が一つの文字とことばをもつようになり、また一方では聖書を訳すことによって、スラヴのことばが、文化を支え、作りだし、発展させることのできることばとしてはたらく素地が作られたということになるからです。

一方スラヴの人々が自分たちのことばで聖書の教えを聞く、ということに対しては、特にローマ正教を信じる人々の間に、根づよい反対がありました。その頃キリスト教を信じている人々のあいだには「三言語説」という考え方が、広く信じられていたからです。

聖書によると、キリストがゴルゴタの丘ではりつけにされたとき、柱の上の、罪人の罪を書く、「すてふだ」という板に、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語の三つのことばで「ユダヤの王、ナザレのイエス」と書かれていたといわれます。当時の人々はこのことをとりあげて、キリスト教の教えはこの三つのことばのどれかで伝えられるもので、それ以外のことばを使うのは正しくない、と考えていました。

このような考え方は教会の権威を高め、牧師のような聖職者と、これらのことばがわからない一般の人々とははっきり区別するのにつごうのよいものでした。しかし一般の人々の立場に立ってみれば、このような考えは、これらのことばのわかる一部の特権的な人々にしか、聖書の教えを直接に知ることができないという状態を作りだすものでしたし、またこのような考え方によれば、それぞれの民族の独自性というものも、育てることはできませんでした。

このような意味からも、スラヴの人々が自分たちのことばで聖書の教えを直接に聞くことができるということは、その頃としては、大変な事件だったということができます。

コンスタンチノスとメトディオスの兄弟はこの大切な役目を立派に果しましたので、あとになってスラヴの聖人としてあがめられるようになりました。わたしたちは、この二人を「スラヴの使徒」とよびならわしています⁶。

⁶以上 No. 13 (1980年10月20日)、6-7頁に掲載。

VI. スラヴの使徒と大モラヴィア帝国の運命

§13 コンスタンチノスとメトディオスはモラヴィアに着いて、キリスト教の教えを、人々によくわかることばで伝えはじめました。このモラヴィアから、やがてキリスト教の教えとスラヴの文字が、スラヴ世界の隅々にまで広がっていくことになります。

二人の兄弟はおよそ三年半ほど、このモラヴィアにとどまりました。そのあと皆にわかれをつけて、イタリアのベネチアにむかいました。ビザンチンのふるさとに帰るためです。

途中二人がパンノニアという地方を通ったとき、このあたりを治めていたコツェルという公がこの兄弟に会い、教えを聞いて兄弟をうやまうようになりました。二人がベネチアについたとき、ローマ教皇の使いが二人を待っていました。ローマに来るようというニコラス教皇の口上を二人に伝えるためでした。まえにいいましたように、教皇は一度はラスチスラフのたのみを断りましたが、そののち、自分の考えを変えたのでした。

けれども兄弟がローマについたとき、教皇はもう亡くなっていて、ハドリアヌスⅡ世が次の教皇になっていました。ハドリアヌスⅡ世は亡くなった教皇の考えを受けついで二人をあたたかく迎え、二人にラスチスラフ、スヴァトスラフおよびコツェルにあてた手紙をことづけました。

教皇がこういうように考えをかえたのは、このままではスラヴ世界がギリシア正教の影響のもとに入ってしまうだろうとおそれたからです。しかし一方ローマ正教は、三言語説をきびしくまもっていました。そこで板ばさみになった教皇は、聖書の教えをスラヴのことばで伝えることをみとめるかわりに、まずラテン語でミサの祈祷書を読み、スラヴ語で読むのはそのあとにするようにと手紙の中に書くことによって、このもんだいを解決しようと思いました。

コンスタンチノスはローマにいるあいだに病気になりました。彼はここで僧になり、キリルという名前をさづけられましたが、869年にとうとう亡くなってしまいました。

§14 この同じ年の末、あとに残された兄のメトディオスは、弟キリルの遺志を受けついでふたたびモラヴィアに行くことにしました。途中いろいろな出来事がありましたが、メトディオスがモラヴィアに着いてみると、留守のあいだにフランク王国の力が強まり、その手先としてローマ正教の僧たちが入りこみ、力を振っていました。これらの人々は三言語説という大原則をゆずった教皇の方針にとっても不満でしたから、早速メトディオスをつかまえて、牢屋に入れてしまいました。また古代スラヴ語文化の力がつよまってフランク王国の力が弱まり、自分たちの地位があぶなくなることを恐れたからです。

けれどもたとえメトディオスをつかまえてみても、しっかりと人々のあいだに根を下ろした古代スラヴ語の影響が広がっていくのを、おしとどめるのは、むづかしいことでした。

そこで教皇になったヨハネス VIII 世は、古代スラヴ語で伝導することをみとめた *industriæ tuæ* という回勅を出しました。この回勅のおかげでメトディオスはやっと牢屋から解放されることになりました。彼が牢に入れられてからすでにおよそ三年半の月日がたっていました。

885 年メトディオスが亡くなりましたが、そののち大モラヴィア帝国の王スヴァトプルクは、フランク王国の政治的な圧力に負け、メトディオスの弟子たちを国外に追放してしまいました。

大モラヴィア帝国も 906 年に滅びましたが、輝やかなしい最初の古代スラヴ語の伝統も、このようにしてこの地域では、終りをづけることとなります⁷。

VII. チェコの国の成立 — ラテン語と古代スラヴ語のたたかい

§15 大モラヴィアがほろんでしまったあと、チェコの人々は、自分たちの国を築きました。十世紀のことです。はじめこの国の首都になったのは、レヴィー・ハラデツというところでしたが、間もなくプラハに移されました。

大モラヴィア帝国で使われていた古代スラヴ語は、帝国の領土であったこの地方にも、もちろん広まっていた。しかしゲルマン民族によって建てられたフ

⁷以上 No. 14 (1981 年 2 月 20 日)、6-7 頁に掲載。

ランク王国によって代表されていた西ヨーロッパ文化の影響は、ゆっくりとではありますが、着実にこの地方にも及んで来つつありました。

このような西ヨーロッパの影響とビザンチンの影響とのたたかいは、何よりもまず宗教上の問題としてあらわれてきましたが、それはまたことばの問題として最もはっきりとした形をとることになりました。つまり古代スラヴ語を使うか、ラテン語を使うか、というかたちで、このたたかいが表面にあらわれてきたのです。

十世紀から十一世紀の終りごろにかけては、古代スラヴ語とラテン語がたがいに競争しあい、さいごにはラテン語が勝利をおさめた時代だと、いわれています。

§16 これまでの話からはっきりわかりますように、大モラヴィア帝国のときも、またチェコの国のばあいにも、ことばの問題はただことばだけの問題ではありませんでした。それはなによりもまず政治の問題でしたし、宗教の問題でもありました。そしてそれはさらに文化全体の方向を決めるという、とても大切な問題でもあったのです。

このようなむづかしい状況は、たとえばチェコのヴァーツラフ公(922-936)のばあいにも、みることができます。ヴァーツラフ公は若い時から古代スラヴ語とラテン語の両方を勉強していた、といわれています。ところがヴァーツラフ公とほとんど同じ世代だったフランク王国の皇帝のオットーI世(936-973)が、文字を学んだのは、ずっと年をとってからだったとされています。この違いはローマ正教の国で、しかもその頃強い力をもっていたフランク王国の皇帝にとって、ことばの問題は、彼が政治をするうえで、さほど大切なことではなかったためだと考えられています。

§17 さてここでこの時代に、どういうものが何語でかかれていたかを少しみってみることにしましょう。そうすれば古代ロシア語とラテン語のたたかいの時期といわれる、この時代の特徴が、いくらかつかめられるからです。

まず古代スラヴ語で書かれたものには、「聖ルドミラ女公伝説」や、「聖ヴァー

ツラフ伝説」といわれるものがあります。その外にもたとえば「ヴァーツラフ讃歌」が作られました。十一世紀になると「聖ヴァーツラフ公の生誕と殉教」の外に、ギリシア語から訳された「ブラハ・グラゴール断片」といわれているものがあります。一方ラテン語から訳された「聖ベネディクトス伝」や、教皇大グレゴリウスの「福音書による対話集」のようなものもありました。

これに対してラテン語では十世紀のなかばにはすでに、古代スラヴ語で書かれたものを下じきにして作られたと思われるルドミラ伝説「ボヘミアの地にありき」といわれる作品や、「キリスト信仰の広まるときに」ではじまるヴァーツラフ伝説が書かれました。さらにこの世紀の終りごろになると、「聖ヴァーツラフおよびその祖母ルドミラの生涯と殉教」という大きな作品が作られました。この作品はラテン語で書かれたものではありませんでしたが、古代スラヴ語の文化をまもろうという熱意に満ちあふれたものだといわれています。

また十三世紀になって書かれたとみられるヴァーツラフ伝説「日の既に昇りしとき」や「日の義しき光を放るとき」という作品も、ヴァーツラフをチェコの人々の守り手として描いたものでした。

このように古代スラヴ語の文化がだんだんとラテン語文化の波におし流されようとしている中で、たとえラテン語で書かれていても、内容としては古代スラヴ語の文化を守ろうとする努力が、いろいろな形で続けられていたことを、私たちは、これらの作品から読みとることができます⁸。

VIII. ラテン語の勝利

§18 まえにお話したように、十一世紀になると、ラテン語の使われることがだんだん多くなってきました。またラテン語の使われ方も、だんだん変わってきました。はじめラテン語は宗教関係のものにしか使われないのが、ふつうでした。しかしラテン語がよく使われるようになるにつれて、法律や歴史の書物にも、ラテン語で書かれるものが増えてきました。

法律に関係し、ラテン語で書かれたものの中で特に有名なのは、1039年に出さ

⁸以上 No. 15 (1981年10月20日)、6-7頁に掲載。

れた「ヴラチスラフの勅令」といわれるものです。

歴史に関する文書類は、そのままの形では残っていません。けれども十二世紀に書かれた、有名な「コスマスの年代記」または「チェコ年代記」といわれるものの中に、十一世紀にラテン語で書かれたと思われる部分があります。このことから十一世紀にラテン語で書かれた、歴史に関するいろいろな文書があって、それをコスマスが年代記を書くときに利用したに違いない、とわたしたちは考えています。

このような動きの中で、古代スラヴ語を一番ながく守りつづけていたのは、サーザフ僧院というところでした。しかし1097年になると、古代スラヴ語でキリスト教の儀式を行っていた人々が、とうとうこの僧院からも追いだされるということが起りました。そしてそのかわりに、儀式をラテン語で行う人たちが任命されました。こうして古代スラヴ語の伝統は絶えてしまったのです。

けれどもこのサーザフ僧院をつくった聖プロコピウスという人については、十三世紀と十四世紀にラテン語の伝記が書かれています。聖プロコピウスはもちろん、古代スラヴ語で儀式をする立場の人でしたから、この人の伝記が書かれたということは、そのことだけでも大きな意味があります。実際これらの伝記の中には、古代スラヴ語で儀式を行う人たちの立場をまもろうとする考え方がみられます。この二つの伝記の名前を挙げておきますと、一つは「大伝記」とよばれる、「かくてボヘミア人、至福なる僧院長プロコピウスありき」というもので、もう一つは「小伝記」といわれ、「かくて至福なるプロコピウスは」とよばれるものです。

こういうと皆さんは変な題の本だなと思われるに違いありません。実はこの時代の書物は、題名のないのが普通だったのです。しかしそれではとても不便です。そこで私たちは書物の一番はじめの書きだしの部分をとって、その書物全体をあらわすことにしています。これをインキピトといいます。これはラテン語で「彼ははじめる」という意味なのです。

§19 ところでせっかく人々の話すことばに近かった古代スラヴ語がどうして負

け、人々にまったくわからないラテン語に、とってかわられたのでしょうか。政治的な理由については前にも言った通りですが、理由はそれだけではなかったと考えられています。

前にもいったように、古代スラヴ語が使われるようになったのは、大モラヴィア帝国のときでした。この頃は、封建制度という社会のしくみができ上っていく、わりあい早い時期でしたから、支配する人々は、国中の人たちが、それまでの氏族や種族ごとの集まりから、みんなで一緒に大きい国を作っているのだ、という考え方によっていくようにしなければなりません。それまでの多神教をやめて、ただ一つの神を信じるキリスト教を取り入れたのも、そのためでした。

ですから国中の人々が、部族ごとに違う神々を信じることをやめ、キリスト教を信じるように仕向ける必要がありました。このためには、人々によく理解できることば、つまり古代スラヴ語を使う方が都合がよかったのです。

けれども十一世紀から十二世紀ごろになると、事情がかわってきました。封建制の社会がだいたいできあがり、人々のあいだのキリスト教の信仰も固まってきました。そうすると国を治める公や、これを支える教会の人たちにとっては、自分たちはしもじもの人々とは違った、学問のある偉い人たちなのだから、皆はこういう偉い人たちのいうことを黙って聞いてついてゆきさえすればよいのだ、と思込ませる方が、都合がよくなってきたのです。

人びとにはまるでわからないラテン語が広く使われるようになったのには、このようなわけがあったのだ、と考えられています⁹。

IX. ラテン語ということば

§20 これからしばらく、ラテン語で書かれたものについて、考えてみなければなりません。けれどもその前に、ラテン語ということばについて、少し説明しておきたいと思います。

ラテン語は、大昔ローマを中心とした、ラチウムという地方ではなされ、やがてイタリア全体に広まったことばです。ですからこれは今では生きたことばでは

⁹以上 No. 16 (1981年12月28日)、4-5頁に掲載。

ありません。けれどもこのことばで書かれたものは、昔からたくさん残されています。

たとえば紀元前三世紀ごろには、エンニウスとか、プラウツスというような作家がいました。およそ紀元前一世紀から紀元ちょうどの頃の、共和制の時代には、たとえばキケローとかカトーとかいう人びとの書いたものや、シェイクスピアの戯曲で有名なユリウス・カエサル(ジュリアス・シーザー)の書いたものなど、数多くの作品が残されています。

またカエサルの養子だったアウグスツス・オクタヴィアヌスが、カエサルの殺されたあと皇帝になって、それまでの共和制がくずれてしまっても、たとえばウェルギリウスやサルスチウス、カトルスやユーヴェナリス、オヴィディウスなど、多くのすぐれた作家や詩人たちが、このことばを使って作品をつくりました。歴史に関しては、タキツスやリヴィウスなどの名前が、よく知られています。

このことばは、ローマがヨーロッパの大帝国になったとき、このローマ帝国の公用語として使われていましたが、ローマ帝国の力がよわまり、やがてほろびてしまうと、それぞれの地方で違った発達をし、やがて違ったことばになってきました。これらのことばはロマンス諸語とよばれています。たとえばフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語などがその仲間です。

§21 しかし前にもいいましたように、当時三言語説が広く信じられていましたから、ラテン語は、ローマを中心とする西方教会で、長いあいだ公用語として使われました。いまでも、教皇庁のあるローマのヴァチカン市では、ラテン語が公用語の一つとして使われています。

一方ラテン語はすぐれた文化の伝統のいない手でしたから、これは日本語と漢文の関係と同じように、西方教会に属する国々の文化や生活に、深い影響を与えました。

これとは別にギリシア正教を信じる国々では、宗教の中心がビザンチン帝国でしたから、公用語としてはギリシア語が使われていました。けれどもビザンチン帝国は1453年、オスマン・トルコといわれるトルコ族の国によってほろぼされて

しました。そこでビザンチン帝国にいた多くの学者や僧侶たちは、モスクワに逃げて行きました。その時から今にいたるまで、モスクワはギリシア正教の中心になったのです。

けれどもロシアの教会では、チェコの場合とちがって、古代スラヴ語が公用語としてずっと使われていました。この古代スラヴ語は、教会で使われているうちに、話しことばであるロシア語をとり入れて、少しずつ変わってきました。わたしたちはこのことばを「教会スラヴ語」とよび、「古代スラヴ語」と区別しています。

こういうわけでギリシア正教は、ギリシア語のかわりにいまでは教会スラヴ語を公用語として使うようになっています。

このように教会スラヴ語は、ギリシア語やギリシア的な文化と深い関係をもっていましたから、この教会スラヴ語の影響を強く受けたロシア語と、ラテン語やラテン的な文化の影響を受けたポーランド語やチェコ語などとは、近い親せきにあたることばなのに、性格がだいぶ違ったものになってしまいました。

この違いはこれらのことばを勉強してみれば、はっきり感じとることが出来ます¹⁰。

X. ラテン語の支配のかけに — コスマスの年代記

§22 十二世紀のはじめになると、チェコの文化のすべての面で、ラテン語が勝利をおさめますが、これにはその頃の政治的な状態も、深い関係をもっていました。

この頃にチェコの国を治めていたのは、プシェミスル王朝の人びとでした。プシェミスル王朝は、十世紀の終り(995年頃)に、それまでチェコの国を支配していたスラヴニーク家を打ちやぶって、この国を自分の手におさめたのです。けれども、十二世紀頃になると、チェコの国は、あいつぐ戦いのために疲れ切っていました。

ここに目をつけたゲルマン族のサクソニアの王は、チェコの国を治めるものは、前もって自分が承知していないといけない、というとりきめを、チェコの人びと

¹⁰以上 No. 17 (1982年4月20日)、5頁に掲載。

に押しつけてしまいました。チェコの国を、自分の思うとうりにしようとしたのです。

チェコの国の力は、1125年から1140年までこの国を治めたソベスラフI世の時に、かなり強まりましたが、それでもゲルマン族の王たちの口出しをやめさせることは、できませんでした。

そればかりではありません。いろいろないきさつがあって、ソベスラフI世のあとを継いで王になったヴラヂスラフII世(1140-1172)は、その頃神聖ローマ帝国の皇帝だったフリードリヒ・バルバロッサ(バルバロッサというのは、「赤ひげ」のことです)にとり入って、その手下のようになってしまいました。

こういうわけで、この時代になると、チェコの国の力はまたとても弱くなってしまうしました。ラテン語が強い影響をもつようになったのは、このような神聖ローマ帝国の力が、チェコに強くはたらいたからだ、といわれています。

§23 この時代には、歴史についてのいろいろな作品が書かれました。その中でも特に有名なのは、コスマス(ca. 1045-1125)という人の書いた、「ボヘミア年代記」でした。ボヘミアというのは、ラテン語でチェコを指すことばです。これはまた「チェコ年代記」ともよばれ、チェコの民族が生れた神話の時代から、1125年までのできごとを誌しています。

日本ではこれにあたるものに、「日本書紀」や「古事記」があります。自分の国の歴史が書かれるということは、その国の人びとにとって、とっても大切なことだと、いうことができます。人びとは、歴史を読むことによって、自分たちの国がどういうようにして生れ、どういうように発展してきたかを、知ることができます。そして自分たちの国にほこりを持ち、大切にしようという気持を強くするようになります。こういう意味で、歴史は民族の心のささえになる、ということができません。ですから歴史をねじまげたりせずに、正しく理解することは、とても大切なことだといえます。

こう考えてみると、コスマスが「チェコ年代記」をどういうつもりで書いたか、ということとは別にして、こういう歴史が書かれたということ、そのことが、チェコ

の人たちにとって、どんなに重要なことだったか、よく理解することができます。

この「チェコ年代記」のもつ意味は、いま言ったことだけではありませんでした。ラテン語としても、とても立派な文章で書かれ、サルスチウスなどの昔のラテン語作家の作品の伝統を受けつぐものでした。ですからこの年代記は、チェコの国内だけでなく、ひろく中世ヨーロッパ共通の文学として、むかえられたのです。

§24 コスマスは、前にいいましたサーザフの僧院のことや、そこで行われていた古代スラヴ語の儀式のことについては、何も書いていません。このことから、コスマスは、きっと古代スラヴ語の儀式や古代スラヴ語の文化に反対する考えをもっていたのだらうと、考えられています。

また、コスマスは、教会や王の力を強くして、封建制度を強めたいとも、考えていました。今では封建制度を強めたい、などというと、何という古い考えの持ち主だろうと思われるに違いありません。けれども、その頃は、封建制度がしっかりしたものになっていく途中でした。だから封建制度を強めることは、新しい経済のもとをしっかりと固め、人びとの暮らしをよくすることにつながっていました。ですからコスマスの考えは、その頃の社会のしくみの中では、進歩的な役割りを果していたといえます¹¹。

XI. ラテン語の支配のかげに — コスマスの後継者たち

§25 コスマスのあと、多くの人々が歴史について書きましたが、コスマスの年代記をそのまま受けついだのは、ヴィシエハラドというところにいた、カトリックの僧侶だといわれています。この人については、名前も、どういう人だったのかも、よくわかってはいません。けれどもこの人はコスマスがなくなって、年代記が途中でとぎれた1125年の翌年にあたる1126年から、新しく年代記を書きはじめ、1142年のできごとまで書きつづけました。

この人は、事実をありのままに書いたといわれますが、それでもヴィシエハラ

¹¹以上 No. 18 (1982年8月10日)、22-23頁に掲載。

ドの僧侶でしたから、教会の立場をまもってくれる公たちに好意をもっていました。彼は自分の年代記の中で、とくに教会を建ててくれたヴラヂスラフ II 世と、ソベスラフ I 世をたたえています。彼は封建的な愛国主義をもっていて、チェコの国を愛していましたから、ゲルマン的なものを、こころよく思っていないませんでした。

ですから彼がチェコの聖人達をほめたたえようとしたのは、ごくあたりまえのことでした。とりわけ彼は前にもいったことのある、聖ヴァーツラフ公をうやまっていました。そこで彼は1126年に聖ヴァーツラフがフルムツェという所でドイツの軍隊と戦ってうちやぶったことをたゝえ、聖ヴァーツラフ公をチェコ民族の父であり、ヴァーツラフ一族の父だとみなしました。

このような考えは、国は公の持ちものだという、封建的な観方だといえますが、一方ではチェコの民族が、独り立ちできる民族だという考え方のあらわれだといえることができます。

§26 十二世紀の七十年代になると、サーザフ僧院の僧侶が年代記を書きました。この人についても、やはりどういう名前の人だったのか、わかっていません。

この人はコスマスがきつとわざと書かなかったとおもわれる聖プロコピウスのことや、サーザフ僧院が建てられたいきさつや、サーザフの僧院で古代スラヴ語の儀式が行われていた時代のことなども、書きしるしています。

それだけでなく、1162年にレギンハルト(ラインハルト)という人が、この僧院の司教になるまでの、この僧院の歴史についても、書きのこしています。

この人は西方教会の僧ではありましたが、チェコの人でしたので、古代スラヴ語の儀式について好意をもっていました。そしてゲルマンの勢力をひろげようとする、ゲルマンの公たちのやり方は、チェコの国をばらばらにしてしまうことになると考えて、これに反対する立場をもっていました。

§27 次に有名なのは、ヴィンツェンチウスという人の年代記です。これには1158年から1167年までのできごとが書きしるされています。ヴィンツェンチウ

スはヴラヂスラフ II 世の時代について書きたいと思っていたようですが、突然の死によって、この年代記は途中で終わってしまいました。

ヴィンツェンチウスは大司教ダニエル I 世 (1148-1169) の下にいた僧侶で、ダニエル大司教と一緒にヴラヂスラフのミラノ遠征に参加しました。1158 年のことです。このためヴィンツェンチウスの年代記は、チェコの歴史だけでなく、イタリアの歴史にとっても、大切な資料となっています。

ヴィンツェンチウスのあとを継いだ人に、ヤルロフという人がいました。この人はラテン語の名前をゲルラクスとって、ミレフスク修道院の院長でした。彼は 1165 年に生れ、1230 年頃になくなったといわれています。彼が書きのこしたもののうち、私たちの時代まで伝わっているのは 1198 年までのできごとをしるした、ごくわずかな部分だけです。ある学者は、この人がライン地方出身のドイツ人だったといっています。そうだったかも知れませんが、残された年代記を読めば、この人はチェコの民族の心をもった人だと思われま¹²す。

XII. ラテン語の支配のかげに — しめくくりの一章

§28 これまで述べてきたものの外に、ラテン語でかかれた大切なものとして、法律関係のものがあ¹³ります。

1183 年にコンラート・オットーが公になりましたが、このときに出された法律として「オットー公法令」といわれるものがあ¹⁴ります。これはキリスト教の教えと、封建制度の利益にそむかないようにしながら、チェコの人々のあいだに古くから習慣として伝わっているおきて(これを慣習法とい¹⁵います)をもとに作った法律でした。こういうわけでこの法律にはチェコにしかないようなことがらもとり入れられていましたので、これをあらわすには、どうしてもチェコ語のことばをとり入れなくてはなりませんでした。

ですからこの法令はチェコの古くから伝わる社会や習慣についてしらべるためだけでなく、古いチェコのことばをしらべるときにも、とても大切な材料になっているのです。

¹²以上 No. 19 (1982 年 12 月 27 日)、9 頁に掲載。

このほか教会の法律もチェコにとり入れられ、使われるようになりました。それから役所から出されたものや、個人的な書きものも、たくさん残されています。

これらは十四世紀まではほとんどみなラテン語で書かれていました。これらのものもみなチェコの社会やくらしに関係の深いものだったので、やはりチェコ語のことばをたくさん取り入れないわけにはいきませんでした。

このようにラテン語の中にまざっているチェコ語の単語を、専門家はボヘミカとよんでいます。

§29 さて、教会の力がだんだん強まってくると、聖ヴァーツラフやプロコピウスの伝説のほかにも、いろいろな伝説が作られるようになりました。その中で一番有名なのは、「聖アダルベルツス殉教の詩」といわれるものです。

そのほかチェコの聖人たちについての讃歌もいろいろ作られました。特に聖ヴァーツラフの信仰は、教会だけでなくチェコの国、とりわけブシェミスル王朝を支える、大切な柱になりました。

この信仰がブシェミスル王朝の重要さを、国の中だけでなく、国の外にも示すことになり、封建制を強めることに役立つものとなったからです。

§30 十三世紀頃になると、プラハの城の中にある聖イルジー(ゲオルギウス)教会のベネディクト派の祈祷書の中に、復活祭のための儀式の内容が書きしるされました。これは「墓の訪れの儀式」とよばれています。ヤコブのマリア、サロメのマリア、マグダラのマリアの三人のマリアが、聖油をキリストの遺体に塗ろうと思って、墓地の中をさがしているとき、天使があらわれて、キリストが復活したことをしらせます。それからキリストが庭師の姿をしてマグダラのマリアの前にあらわれたこと、どうしてペテロとパウロがキリストが復活したことを信じるようになったかということなどが、劇の形で儀式の中にあらわれます。中世の演劇はどこでもおよそこのような形ではじまりましたが、チェコの場合にも、これが中世の演劇のはじまりだと、考えられています。

このほか説教集も残っています。これはラテン語で書かれていますから、ラテ

ン語のわかる僧侶たちにはそのまま話されたのだと思われます。けれどもラテン語のわからない普通の人たちには、おそらく同じことがチェコ語で話されていたに違いありません。

まえにもいいましたように、キリスト教は封建制度をささえる大切な柱でしたから、僧たちだけでなく、みんなに喜んでうけ入れられるものでなければ、なりませんでした。

こういうわけでこれらの説教の中には、身近な例がよく使われました。

こういうようにしてチェコの人々は、ラテン語が支配しているときでも、決してチェコ人の魂まで売りわたしてしまったわけでは、ありませんでした。反対にラテン語を使っている、その中でチェコの伝統を伝え、新しい伝統をつくりだし、自分たちの道を歩もうと努力していたということを、わたしたちははっきり知ることができます¹³。

XIII. 世の中のうつりかわり I

§31 十二世紀のはじめ頃になると、経済がだんだん発達するにつれて、人々の暮らしにもいろいろな変化が起るようになりました。それまでは農業のかたわら、いろいろなものを作っていた人々が、職人として独立するようになり、農業と手工業とが分れるようになってきました。またこれらの職人たちが集ってくることによって、都市が発達してきました。そうすると商業もだんだん盛んになってそれまでの物々交換では都合がわるくなってきました。こうしてお金でものを買ったり売ったりする制度が発達してゆきます。これを貨幣経済といいます。この貨幣経済はやがて農村にもひろがり、人々はそれまで農作物で納めていた貢物のかわりに、だんだんお金を納めるようになってきました。

このように進んだ形をもった封建制度を、専門家は「成熟した」封建制度といって、それまでの初期封建制度と区別しています。

このように世の中のしくみが変わり、経済的な力が強くなるにつれて、チェコの国の力もだんだん強くなってきました。これはやがてカール IV 世のときにブラ

¹³以上 No. 20 (1983年8月20日)、3頁に掲載。

ハが神聖ローマ帝国の首都になり、政治だけでなく、経済や文化の中心となるものになったのです。

たとえば建築の面でとくに目立つのは、それまでのロマネスクという、素朴な円い感じの建て方から、ゲルマン的で、荒々しいけれども華やかな、ゴシックという様式にかわっていったことです。これは建築だけでなく、絵や彫刻などの美術にも影響を与えて行きます。

§32 このような社会や暮らしの変化は、チェコ語にも、いろいろな影響を与えました。ことばというものは、いつでも人々の暮らしや社会のしくみ、社会や文化の動きと、深いむすびつきをもっているからです。

しかしことばの発展の仕方は、世の中がいろいろと複雑ですから、決して簡単なものではありません。そしてこのことはチェコ語の場合にもあてはまります。

この時代のはじめには、前の時代に引きつづいてラテン語が書きことばとして広く使われていました。この時代にも、教会の力がますます強くなっていったからです。

教会が封建制度を支える重要な柱だったことは前にもいった通りです。けれども教会は、精神的に封建制度を支えていただけではありませんでした。チェコの教会は、このころ国中の土地のおよそ半分を、自分の領地としてもっていたのです。ですからこの頃の教会は、経済的にも公と同じくらい強い力を持っていたといえます。

教会はこのような実力を背景にして、教会を支えるいろいろな学校をもっていました。スコラ哲学を教える学校をもっていただけでなく、宗教に関係の深い芸術や音楽、彫刻や建築などのほとんどすべての学問を、自分の手ににぎっていたのです¹⁴。

XIV. 世の中のうつりかわり II — 町と村

§33 前の節で世の中のうつりかわりについて大まかにお話ししましたが、ここ

¹⁴以上 No. 21 (1983年12月30日)、7頁に掲載。

ではこのうつりかわりをもう少しわしく見てみたいと思います。

まえにも言いましたように十三世紀頃にそれまでの「初期」封建制度は、「成熟した」封建制度に変わっていきます。そしてそのもとで仕事の分業が進み、都市が発達して来ますが、これは実は農業のおかげなのです。どうしてかと言いますと、農業が発達して十分な食物が作られなかったら、町に住む人々にまで食物が行きわたらなくなり、町の人々は生活していけないからです。

このことからわかりますように当時のヨーロッパには全体に耕地を拡張しようという動きが盛んだったのです。耕地を拡張してもこれを利用するだけの力を当時の社会はすでにもっていたからです。このことによってそれまで人の住んでいなかった山のふもとや高地の上、森の奥や沼地にまで、人が住みつくようになりました。これを「植民」といいます。

この植民を進めたのは、そのことによって直接豊かになる王様や大貴族、それに教会でした。

このような背景の中で町が作られていったのですが、国を治めている王様も、町ができると経済的に豊かになるので、町を作ることに賛成でした。それで時にはそれまで全く人のいなかった所に町を建てるということも起りました。ですから町の建設も、やはり植民の一つの形だったということが出来ます。

§34 このような植民には多くの人手がいります。そのために多くの人々が集って来ましたが、その中には主にドイツ語を話すゲルマン系の人々もたくさんいました。村に植民したこれらの人々は、はじめはチェコの人たちとはちがう言葉をはなし、異った習慣をもっていました。やがてまわりのチェコの人々と同じことばを話すようになり、最後にはチェコの人々と変りないようになります。

町の場合には、主だった人々の多くがゲルマン系で、町の貴族を形作るのが常でした。これらの人達はやがて大きな財産をきずき上げ、国の経済や政治の面でも力を持つようになりました。これらの貴族達は自分達のことばであるドイツ語や、自分達の風習をなかなかすてようとはしませんでした。

このように貴族達の力が大きくなるにつれて、もともとチェコに住んでいた騎

士階級の人々はこれを快くは思わないようになります。騎士階級は村に生活の基礎をおいていましたから、この対立は町と村の対立という形をとることになりました¹⁵。

XV. 世の中のうつりかわり III — チェコの騎士達

§35 1306年にそれまで長年にわたってチェコを支配して来たプシェミスル Přemysl 王朝の最後の王様だったヴァーツラフ III 世が、遠征の途中オロモウツという町で、何者かによって殺されてしまいました。このことをきっかけにして誰がチェコの新しい王様になるかについて、争いが起きます。その中で神聖ローマ帝国の皇帝だったハプスブルグ家のアルブレヒト I 世は、自分の息子のルドルフを王様にしようとして、プラハにやって来ました。そして騎士達を納得させるために、彼等にいろいろな特権を与えるという約束をして、やっとのことで息子を王様にすることに成功しました。これは一時の成功でしかありませんでしたが、ともかくこのことからわかるように、この時にはチェコの騎士達は、もう国の代表とみられるほどの力を身につけていたのです。

§36 ところで当時の騎士達のあいだには、西ヨーロッパで盛んだった騎士道が流行していました。騎士道は十二世紀に南フランスではじまったとされていますが、チェコには十三世紀になってドイツから伝わって来ました。

皆さんもきっと映画や絵などでごらんになったことがあると思いますが、これはきらびやかな服装や、美しく飾った武器、トルナイという、長い槍をもって馬上からの的を突く競技、婦人を崇拝する風習などの、はなやかな暮らしが特徴です。

また自分達の土地には守りの固い城やとりでをきずき、紋章を作って家のシンボルとして大切に守るという風習も行われました。またドイツの場合と同じように、吟遊詩人のうたうミンネザンクと呼ばれる詩が好まれました。これはもちろんドイツ語でうたわれたものですが、この外にも恋愛詩などがドイツ語で書かれ、もてはやされました。

¹⁵ 以上 No. 22 (1984年3月20日)、3頁に掲載。

このように騎士階級にははじめドイツ語による文化が強まっていましたが、ドイツ語を使う貴族や、ドイツの影響が強かった王様の宮廷などとの利益の対立がはげしくなるにつれ、十三世紀の中頃からは、自分達のチェコ人としての立場をはっきり示すために、チェコ語やチェコの文化を大切にしようとする力が、騎士階級の間に強まって来ます¹⁶。

XVI. 世の中のうつりかわり IV — 貴族と町の人びと

§37 まえにいいましたように、成熟した封建制度に入った十三世紀には、町を支配している貴族たちと、村に基礎をおく騎士階級の人々との対立がみられましたが、町といっても、全部が一体になって村に対立していた訳ではありませんでした。町に住んでいた人びとは、手工業や商業のような、これまでと違った職業についていましたが、これらの職業は当時の社会ではとても大事なものでしたので、かなり自由な立場にいました。そしてこれらの人々の役割りがますます大切なものになるにつれて、政治的あるいは身分的な自由もますます大きくなりました。市民階級の出現です。十三世紀の後半にはもう大部分の町では自分達で選ぶ市会を持つようになっていました。

このように力を蓄えて来た市民階級の利益が、貴族達の利益とぶつかるようになるのは当然の成り行きといえましょう。

§38 ところで町に住む人々は、それまでの村の生活と違って、狭い土地と一緒に住む訳ですから、どうしても協同生活のための取り決めが必要になって来ます。ブラハでは十三世紀末に南ドイツのシュワーベンで行われていた都市法 *Švábské zrcadlo* (シュワーベンの鏡) を取り入れ、外の都市もこれになりました。北チェコ地方の都市ではこれに対して *Saské zrcadlo* (ザクセンの鏡) というのが取り入れられました。これはマグデブルグで行われていたものと考えられています。

またこの頃チェコの国の繁栄を支えていたのは、銀山でした。特にクトナー・ホラという山で1290年にひらかれた銀山は有名で、全ヨーロッパの銀の41%を

¹⁶以上 No. 23 (1984年11月30日)、5頁に掲載。

ここで生産していたとされています。このため十三世紀の中頃にはイフラヴァ Jihlava という鉱山の町で *Kodex horního práva* (鉱山法令集) といわれる法律ができましたが、1300 年には更に *Ius regale montanorum* (鉱山王令) という法律が、ヴァーツラフ II 世によって作られました。

このようにして市民生活のさまざまな面に文字の必要が生れて来ました¹⁷。

XVII. 13世紀-14世紀前半のラテン語文化

§39 これまでみて来ましたように、十二世紀には、初期封建制度が成熟した封建制度に移りかわるにつれて、社会のすみずみにまで大きな変化が生まれました。

初期封建制度のもとでは、学問は主に教会の手に握られていて、ラテン語で書かれるのが普通でした。このようなラテン語の使用は十三世紀にももちろんつづけられていましたが、その中心となったのはプラハの城の中にあった聖ゲオルギウス修道院 *Svatojiříský Klášter* と、やはりプラハにあったズブラスラフ修道院 *Zbraslavský Klášter* でした。

聖ゲオルギウス修道院では宗教的な詩やドラマが主に作られました。この修道院の院長であったオタカル II 世の娘のクンフタ *Kunhuta* のすすめでドミニコ派の *Kolda z Koldic* という僧が作った「雄々しい戦士について」*De strenuo milite* という作品は有名です。これは人間の罪を引き受けてはりつけになったキリストを、敵(=悪魔)にとらわれてしまった自分のいいなづけ(=魂)を取り戻そうとして長く苦しい旅をして戦う、勇敢な騎士にたとえたものです。このことからわかりますようにラテン語で書かれた宗教的な作品の中にも、騎士階級の力が強まりつつあった当時の社会の様子が映しだされているということが出来ます。

§40 もう一つの中心であったズブラスラフ修道院では、「ズブラスラフ年代記」*Zbraslavská kronika* と呼ばれる「王の宮廷の年代記」*Chronicon Aulae Regiae* が書かれました。それははじめオタ *Ota* という僧が、この修道院を建てたヴァーツラフ II 世をたたえるために書きはじめたものですが、オタのあとをつ

¹⁷以上 No. 24 (1985年6月30日)、5頁に掲載。

いだ修道院長のペトル Petr Žitavský によってチェコ全体の年代記に上げられました。

この外たとえば「ブシェミスルのオタカル II 世王の事件」Příběhy krále Přemysla Otakara II と呼ばれるものや、「ブシェミスルのオタカル II 世王の死後の不幸な年月について」O zlých letech po smrti krále Přemysla Otakara II のような年代記も書かれました。これらはどれも宗教的なものばかりでなく、世の中の色々な重要なことがらを書きあらわしていましたから、このようなものがラテン語で書かれたということは、それまで宗教的なものにしか使われなかったラテン語の使われ方にも変化があらわれて来たといえます。

§41 もちろんラテン語で書かれたもののうちには、それまでと同じ宗教的な聖人の伝記もみられましたが、時代の変化をよくあらわすと思われるものとして、役所などの事務に使われるラテン語が広まったことがあります。

チェコの国が封建制度の新しい段階に入ってますます発展するにつれて、色々な役所ができ、また色々な書類が必要になって来て、公証人と呼ばれ、書類を作る専門の人もたくさんあらわれるようになりました。そしてこのような人たちを育てる学校もできてきました。学校ではうまい文章を作るための修辞学という勉強や、整った書類にするための書式の勉強が行われました。このためにいくつかの「書簡集」Formaulář がお手本として作られました。この中では王様の役所につとめていたイタリア人のエンリコ Jindřich z Isernie という人の作ったものなどが有名です。これらの書簡集には本当に書かれた手紙の外、仮に作った手紙も文例として収められていました。もちろん作った手紙も本物らしく見せるために実在の人や実際の事件などが使われました。たとえばいまいましたエンリコの書簡集に含まれているブシェミスル王朝のオタカル II 世がポーランドの公達にあてた形になっている、1278年の日付のついた文例には、ドイツ人達の横暴さと食欲さに対してスラヴの人々が団結しなければならないということが書かれているといわれます。このことから私達はスラヴ民族の目覚めが、ラテン語で書かれたものの中にも反映していることを知ることができます。

このほかこの時代にはたとえば薬草の名をチェコ語に訳した「草木語彙」*Rostlinář* などもいくつかあらわれました。

これまで述べて来たことから、私達は、この時代のラテン語の使われ方は、時代を映して宗教的なものだけでなく、チェコの人々の生活に近づきつつあったとみることができます。これをラテン語文献の「世俗化」と専門家は呼んでいます¹⁸。

XVIII. チェコ語文化の萌し

§42 ラテン語文化の世俗化が起こってきますと、書かれていることがらが、宗教的なものではありませんから、どうしても僧侶たちの手を離れるようになってきます。そしてこのような内容のものは、社会のうつりかわりにつれて、ますます力をもつようになってきた、チェコの騎士階級の人々の間に広まっていきました。

これらの人々の中には、やがてドイツ人たちの暮らしをまねする人たちも、現れてきました。チェコではヴァーツラフI世以来、宮廷にはドイツの詩人たちがたくさん客になっていましたから、力をもつようになったこれらの騎士階級の人々も、ドイツ語で書かれた文学に興味を示すようになったのです。

このようなドイツ語で書かれた文学は、騎士階級の中でも、特に力のある人々の間で広まっただけで、騎士階級の全体に広まったわけではありませんでしたが、それでもこのことは大きな意味をもっていました。というのは、このことによって、文字によって書かれたものが、僧侶階級の独占物ではなくなったからです。

この意味で、これはチェコ語文化の露払いの役目を果たしたと、いうことができるでしょう。

§43 チェコの騎士たちが力を持つようになってくると、彼らは一方では都市部で力を持っている、富んだドイツの貴族と競争し、他方ではドイツ文化の影響の強い、宮廷に対抗しなければなりません。このためチェコの騎士たちは、これらの「ドイツ的」な相手に対して、いやでも自分たちの立場を意識しないわ

¹⁸以上 No. 25 (1980年1月30日)、7頁に掲載。

けにはいきませんでした。彼らから自分たちを区別するもの、それが外ならないチェコ語だったのです。

このようなわけで、チェコ語文化は、ドイツ語文化に対抗するものとして意識され、チェコ語による作品が作られるようになりますが、チェコ語文化は、僧侶階級が残したものを、そのために利用することができました。前にもいいましたように、ラテン語文化がすでに「世俗化」していて、騎士階級が必要とするテーマや表現方法などを、数多く作りだしていたからです。

§44 叙情的なものとしては、すでに十三世紀の後半には、「世界の創造のことば」ではじまる「オストロフの歌」*Ostrovská píseň* といわれるものがありますが、1300年頃には「クンフタの祈り」*Kunhutina modlitba* が作られました。これは、聖餐式において聖餅がキリストの身体に変わるという教義をあつかったもので、従来ならばラテン語で書かれるはずのものでした。ですから、このような内容のものがチェコ語で書かれたということは、チェコ語文化の幅を広げ、豊にするものであったと、いうことができます。ここで使われている言葉や表現の技法も、ラテン語のものに比べて、決してひけをとらないといわれています。

「クンフタの祈り」や、その後十四世紀の二十年代に書かれたといわれる、「魂と肉体の論争」*Spor duše s tělem* は、作品が長いために、残念ながらあまり広まらなかったといわれていますが、同じ十四世紀の前半に書かれたといわれる、「全能の神」*Buoh všemohúcí* と、「惜しみなき主、イエス・キリストよ」*Jezu Kriste, šedný kněze* は、人々の間で広く歌われるようになりました¹⁹。

XIX. チェコ語文化の萌し(つづき)

§45 このような叙情的なものの外に、「伝説」といわれている種類のものも、多くチェコ語で書かれました。最も古いものには、たとえば「受難」*O umučení*、「使徒たち」*O apostolích*、「精霊の降臨」*O seslání Ducha svatého* などがありますが、これらはみな断片でしか、残っていません。これらは、イタリアのドミ

¹⁹以上No. 34 (1991年12月1日)、2頁に掲載。

ニコ派の僧ヤコブス・デ・ヴォラギネ Jacobus de Voragine が書いた、有名な「黄金伝説」*Legenda Aurea* を下敷にしたものだと、いられています。

チェコにおいてラテン語で書かれた「伝説」には、たとえば「プロコプ伝説」*Legenda o Prokopovi*、「ヴァーツラフ伝説」*Legenda o Václavovi*、「アネシカ伝説」*Legenda o Anežce* などがありますが、これらはみなチェコの聖人について書かれ、その中にはチェコの社会のことがらが、いろいろと取りあつかわれていました。ところがチェコ語で書かれたはじめのころの「伝説」で主にとりあげられたのは、遠い外国の珍しい物語でした。これは一つには十字軍の遠征によって、東方の国々についての興味が高まったことにもよりますが、他方ではラテン語を知らない騎士階級の人々の好みに合わせるためでもあったといわれています。

このようにして「伝説」一つをとってみても、チェコの国の新しい文化の担い手として立ち現れてきた騎士階級の姿を、はっきり見てとることができます。これは比較的新しい「伝説」の場合には、ますますはっきりとしてきて、たとえば「一万人の騎士」*O deseti tisících rytířů* や、「聖ゲオルギオス」*O svatém Jiří* という伝説では、騎士自身が主人公になっています。

§46 このような伝説の発達の方に影響を与えたと思われるものに、「アレクサンドル物語」*Alexandreida* といわれるものがありました。これはマケドニアのアレクサンダー大王の東方遠征についてのもので、「伝説」の最も古いものとはほぼ同じ頃に書かれたと、考えられています。アレクサンダー大王の遠征は、中世では最も好まれた題材の一つで、いろいろな国で作品が作られましたが、チェコの「アレクサンドル物語」は、十二世紀末にラテン語で書かれた、グアルテル・デ・シャティオン *Gualter de Chatillon* のものと、ドイツ語で書かれた、ウルリヒ・フォン・エッシェンバッハ *Ulrich von Eschenbach* のものを下敷にしながら、その中には、十三世紀から十四世紀にかけてのチェコの騎士階級の考え方が、いろいろな形でとりいれられていました。

§47 「アレクサンドル物語」のように、遠い国へのあこがれをもとにしたもの

ではなくて、チェコの実際の生活をえがいたものに、1310年から十四年間の間に書かれたといわれる、韻文の「ダリミル年代記」Kronika tak řečeného Dalimiraがあります。これは「アレクサンドル物語」におとらず、人々に好まれました。これが書かれたのは、1306年にプシェミスル王朝の最後の王ヴァーツラフ III世が死んで、ハプスブルグ家のルドルフ III世が即位したときでした。プシェミスル王朝の末期に、チェコの騎士階級は、政治的にも経済的にも力をたくわえ、国を動かす力になりつつありました。「ダリミル年代記」は、このような騎士たちに、国を護る義務と愛国心を訴えるものでした。作者はそれを、チェコの過去の歴史に現れる人々を讃えることによって、行おうとしたのです。ここでは王に忠誠を誓うことが騎士の義務だとされる一方で、もし王が国の利益を損なうようなことがあれば、騎士階級は王をやめさせる権利があるとも、述べられています。私たちはここに騎士階級の民族的な自覚と、政治的な成長をみることができます。この民族的な自覚の支えになったのが、外ならないチェコ語だったのです²⁰。

²⁰ 以上 No. 35 (1992年4月1日)、2頁に掲載。「チェコ語のはなし」はこれを以て中断。